

「歴史的人間学」から見た日本の身体文化

ベルリン自由大学での国際ワークショップ
-日本の身体文化「型」とその文化横断的伝達-
報告論文 (1)

弘田陽介 1) 石田泰史 2)

Japanische Körperkultur in Hinsicht von ‚Historischer Anthropologie‘
Bericht der internationalen Werkstatt über japanische Körperkultur ‘KATA’ (1)

Yosuke HIROTA 1) Yasushi ISHIDA 2)

Zusammenfassung

Am 22. September 2008 führten Hirota und Ishida die internationale Werkstatt "Japanische Kultur - durch 'KATA'(Form/Muster) erleben" in der Freien Universität Berlin durch. An diesem Tag gab es ungefähr 20 Teilnehmer: Professor Ch.Wulf und die 'Historische Anthropologie' Studenten/innen, die einige Übungen erfuhren. In unserer Werkstatt haben sie erst unter Leitung von Ishida die Schwertkunst, Stockkunst und Aikido erfahren. Dann hat Hirota ihnen einigen Bewegungsübung als japanische kulturelle Essenz angeboten. Dieser Artikel besteht aus einem Bericht dieser Werkstatt und dem Nachdenken von KATA,sonst (1) ist der Teil von Ishida.

Schlüsselwörter:

'KATA'(Form/Muster), Japanische Körperkultur, Historische Anthropologie

-
- 1) 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部
Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima
 - 2) 武術操身法「遊武会」
Community of Bujiyutsu, Japanese Martial Arts "YUBUKAI"

はじめに

執筆者は、2008年9月22日、ドイツ・ベルリン自由大学において「Japanische Kultur -durch 'KATA'(Form/Muster) erleben (日本文化—「型」を通しての経験)」というタイトルの国際ワークショップを行った。当日は、主催者である同大学・教育学部部門のクリストフ・ヴルフ教授、および同教授が主導的な役割を果たしている歴史的人間学を専攻するベルリン自由大学の院生ら20人ほどの参加者があった。私たちのワークショップは、文化の問題としての身体技法というテーマで、まず石田が実践研究・指導を行っている居合術・杖術・合気道の演武と稽古を、続いて弘田が日本の文化のエッセンスとしてのいくつかの所作を示し、参加者に体験してもらった。本稿は、このワークショップの報告論文であり、また参加者との質疑などを鑑み、日本の身体文化とその伝達について考察した研究論文である。型についての技術的な解説と練習の手順については、ワークショップで配布したレジュメを元としている。また添付した写真には、事前に撮影したものとワークショップで撮影したものが混在している。なお、本稿は、国際歴史的人間学研究雑誌『パラグラナ』(Internationale Zeitschrift für Historische Anthropologie "Paragrana")に所収されるドイツ語論文'Die körperliche Geheimhaltung und Überlieferung durch 'KATA (Form/Muster)' Bericht der internationalen Werkstatt über japanische Körperkultur (型によって身体を隠すこと、そして伝えること 日本身体文化をテーマとした国際ワークショップについての報告論文)'を元としている。本稿はその日本語版と言えるものであるが、ドイツ語論文では書ききれ

なかった技についての解説や、文化伝達をめぐる考察を盛り込んでいる。

Fig.1 三木静三郎氏の切り絵でつくられたワークショップのポスター。武術家とベルリンのシンボルである熊との出会いが描かれている。



この本稿(1)は、特に石田が行ったワークショップのパートに焦点が当てられている。無双直伝英信流居合術を学び、五段の許可を受けている石田は居合術の他にも杖術、体術を学んできた。現在は、大阪を拠点に「武術操身法・遊武会」を主催し、流派に捉われずに様々な武術に通底する身体技法を学びに来る人々を指導している。弘田も2000年より、石田の下で武術の指導を受け、それ以来、大阪・駒川商店街での演武会開催など多様な場所で交流を続けてきた。また、2006年の教育思想史学会コロキウムにおいて共同でワークショップを開催し、その報告論文(*1)を作成するなど学術レベルにおいても研究交流を行っている。今回のベルリンでのワークショップは

企画段階から、弘田と石田は数ヶ月に亘って打ち合わせ、また遊武会の稽古の場を借りて、予行練習も行っている。ベルリンでのワークショップならびにその報告論文は、これまでの二人の身体技法をめぐる研究交流の総決算と言ってよいものである。

なお、ドイツ語論文およびワークショップのレジュメの作成にあたっては、ヴルフ教授の元で長く学んだ高松みどり氏（現・大阪大学非常勤講師）とエーデリンデ・スタウダッハー氏（ベルリン自由大学在学中）の協力が不可欠であった。そして、石田の下で武術を学んできた古くからの遊武会の会員であり、一枚の紙から構成された切り絵の熟達者である三木静三郎は、このワークショップのために切り絵のポスターをわざわざ構成してくれた。この3人と、当日の参加者全員に特別の感謝を示すことで、本稿を始めさせていただきたい。

Fig.2 ワークショップの様子。



Fig.3 礼式の足捌き。ヴルフ教授およびベルリン自由大学の学生も熱心に武術の稽古法を体験しようとしていた。



1 文化の原理としての型（弘田）

<型についての研究状況とこのワークショップの目的について>

まず、日本の型という概念をわざわざドイツでのワークショップにおいて取り上げた意義について述べておかなければならない。一般的に型とは、日本の文化において共有された身体の所作および所作の手順を意味する。武術や芸術の創設者は、型によってジャンルや流儀を確定させてきた。古典的な技芸の世界では、「型こそがすべて」と言ってよいほどその重要性が認識されてきたが、それを日本文化全般に通じる問題として包括的に論じたのは、文芸評論家として知られる唐木順三である。唐木は、この型の喪失こそを日本近代の現代史を描く切り口としている。その代表作『現代史への試み』の冒頭においては、型は思考様式と生活様式を規定する *Sitte*（ドイツ語：礼節・習俗）として捉えられ、その *Sitte* が日本の近代化の中で失われていくプロセスを、森鷗外らいくつかの文学者のテキストから描き出している（*2）。

唐木の後にもいくつかの型と日本文化を論じる評論が書かれたが、型という身体的な事象を学術的な研究視角から考察した先駆的な成果として、生田久美子の『「わざ」から知る』がある（*3）。生田は、日本文化における型の特徴を、「模倣」、「わざ」、「間」といった概念とのつながりの中で文化内在的に説明する一方で、教育学における知識獲得論というより広い文脈において、身体による学習の概念的な広がりを描き出そうとしている。

また、江戸思想の碩学・源了園がそれまでの研究を1989年にまとめた『型』という著作は、型についての研究を日本文化論および教育論の一つのジャンルとして確定させ、現在でも決定的な影響力をもつもの

である(*4)。能や剣術などにおける型の意義を通史的に解説したのみならず、日本の古典文化と古典思想の結節点としての型という研究視角を切り開いている。

唐木、生田、源の型についての論考はすでに依拠されるべき「古典」として認知されているが、近年にはそれらを踏まえたいくつもの優れた研究成果が公刊されている。身体性に根ざした教育論の新たな潮流をつくった斎藤孝の著作群は、教育における身体の型の必要性を唱え、国民的なベストセラーにまでなっている。その中でも特に『教師＝身体という技術 構え・感知力・技化』は、教師の教壇における所作を「構え・感知力」として論じ、この教育受難の時代における教師のリソース、つまり「型」を提供しようとする著作である(*5)。また倉島哲の著作『身体技法と社会学的認識』は、丹念なフィールドワークによって、型稽古を主軸とした中国武術の指導法およびその指導言語の特性を明らかにしている(*6)。加えて、ドイツ語で書かれた今井康雄の研究は能の基礎をつくった世阿弥の型の理論を当時の時代背景と照らし合わせ歴史的に考察しており、また角谷昌則の弓道についての英語での論文も日本文化の型の理念を丹念に紹介しているというように、この型の研究については国際的な広がりを見せ始めている(*7)。

さて、このように執筆者が知る限りで型についての先行研究を列挙してみたが、本稿がより直接的な影響を受けたのは、今回のワークショップの主催者であるヴルフが打ち出している歴史的人間学の身体をめぐる諸研究である。ヴルフと、同じくベルリン自由大学の教授であるG.ゲバウアーは、彼らの主著であり、また歴史的人間学のマニフェストと呼んでよい著作『ミメシス文化—技術—社会』において、従来のな学

問領域に留まりえない身体の意味作用に着目している。身体を介して、人と人はつながり、文化を生み、社会を創る。この身体によって人はお互いの考えを共有し、お互いを移しあう。この原初的な人間活動の論理—ミメシス—から、古代以来の哲学思想、国家形成、文学といった営みを再把握してみるとどうなるのか(*8)。このような問いかけが彼らの野心的な著作の発端であるが、その身体についての洞察は、M.モースの「身体技法」やP.ブルデュの「実践感覚」に基礎をもち、哲学、文学、人類学や社会学にまで広くウイングを伸ばすものである。またヴルフは近年、やはりベルリン自由大学の同僚であるブラントシュテッターとの共著で、その身体論を「人間学としてのダンス」という形で示している。ここで取り上げられようとしているダンスとは、単なる芸術や身体運動の一ジャンルを指すのではない。「ダンスは歴史的、社会的、民俗学的、そして美学的な意義をもつ。それに応じて、ダンスの文化科学的な考究は、学際的な課題をもつ」(*9)と述べられているように、この「人間学としてのダンス」は人間の諸活動の区分を横断し、躍動する人間の生命感覚、ヴルフたちの言葉で言えば、ミメシスが最も端的な形で示される場としてのダンスなのである。人々は、踊りを見て、見ることで同じく身体の中を動かしている。ダンサーはただの発火点に過ぎない。その火は演じるものと見るものの間を往還し、その二者の区別を次第に奪っていく。「踊る阿呆に見る阿呆、同じアホなら踊らにや損損」。だが、この言葉はダンスだけに通じるものではなく、私たちの人間活動の根底を支えるものであるというのが、ヴルフら歴史的人間学の研究者の一貫した文化に対する見解である。

この文化としての人間活動——特にここ

での文脈に特化すれば、文化としての身体技法は、同様に、従来の具体的な形態をもつ文化ではない。それは、そのような具体物を規定するような形のない身体文化に結びつく。この形のないものは、人々の身体において具体化され、また人と人との間を伝播する。歴史的人間学の文脈では、型に相当する言葉は概念化されていないが、弘田の理解では、型は、この形ある身体と形なき伝播との関係性に関わるものである。

このような型についての研究状況と、歴史的人間学を經由して拡張された型の概念を踏まえて、執筆者たちは実践的な立場から日本文化に通底するものとしての型の理念について示したい。つまり、今回、弘田と石田は日本の武術などいくつかの具体的な身体技法の特徴を示したが、それは具体的な形（態）そのものを問題とするのではない。そうではなく、その形（態）そのものを支える文化・伝播としての身体技法に目を向けたいのである。

また、加えて述べておきたいのは、執筆者は日本文化の卓越性をここで訴えたいのではないということである。そうではなく、ここで実践であり、同時に理論となる身体技法を、文化も身体も異なる私たちが共有することで、文化の問題としての身体技法というテーマを歴史的人間学の一つのテーマとして議論することができる。また本稿の型の理念は、日本文化の底流に流れるものであるが、それは無論、日本や東洋にのみ存在するものではない。例えば、ドイツの古典的哲学者カントは、この型と創造の問題を『判断力批判』で詳細に論じている（*10）。

従って、本稿は、日本文化の伝統について論じたものであるが、それは文化の特異性を誇示するのではなく、文化横断的な視点から考察されたものであることを付け加

えておきたい。また踏み込んで言えば、現代の日本人の身体は大部分において西洋化されている。1960年代までは、和服はほとんどの日本人にとって馴染みあるものであったが、現代の日本人は何かイベントがなければそれを着ないし、ほとんど自力で着ることすらできない。つまり、かつての日本人がどのように和服を着て日常を過ごしていたのか、またはどのように歩いていたのかすらわからないのである。こうして私たちは近代化の中で先祖とのつながり、つまり文化と伝統を失ったのである（*11）。従って、本稿が問題にしたいのは、日本と西洋という対立ではなく、先進国の標準規格となった西洋近代の身体と、かつての土着文化に根付いていた身体との対置なのである。そして本稿が見出そうとしているのは——無論それらは地域・文化ごとに異なり、一括りにすることはできないが——後者の身体である（*12）。

<文化の原理としての型>

さて、日本の型についてのドイツでのワークショップを論じる経緯・背景・独自性について記してきたが、このような形で身体技法を共有し、さらにはそれを通じた経験・学びの技法について考察を共有していくことが、国際的なワークショップと本稿の目的である。多くの人に体験してもらうために、訓練を必要とせずそのまま取り組むことのできる、技術のエッセンスをいくつかここで提示した。それらは、日本の身体技法の基礎の一端であり、同時に文化の原理であると執筆者は考えている。

端的に述べれば、文化とは「伝わるもの」を追求することを至上命題としている。武術においてそれは相手に対する技の効果であり、芸術において快の共有である。行為者が、対象となる相手に対して、何らかの

実体的ないしは非実体的な力を及ぼしていくというのが、伝わる・伝播するということである。しかし、文化は、そのような直接接する相手だけに伝わるものではない。それはかなり広い地域、また個体を越えた長い時間にわたって保持されるものだからである。文化は、直接接することがない人間、また人間を超える存在にまで達するものであるからこそ、数百年もの間、また地域や国を越えて、影響を及ぼすものとなっている。また、そのような文化は、私たちの自覚しない「奥底」にまで届くものである。ある文化から受けた感動は、直接その人間に影響を与えるのではなく、時間を措いてその人間を動かすということはある。また世代を超えて、親から子へ、師から弟子へ受け継がれるのは、そのような自覚しない奥底にあるものであるだろう。

そのような「奥底」にまで届くものは、日本の文化においては「型」というものに託される。型は文字通り、身体の形体や儀式の形式である。しかし、それは単なる形体・形式に留まるものではない。武術において、ある型を丹念になぞることは、単なる形の模倣ではない。それはその型に隠されたものに触れようとする試みである。また、日本における武術とは、人を殺すための技術ではない。それは身体の訓練を目的としたスポーツでもない。戦争のない江戸時代に、武術の流派などが整備されたため、武術は型・儀式・礼儀を備えた体系を有する。しかし、平和な時代だからそのような体系を有する武術が生まれたのではなく、そのような体系には技術論的な必然性が存在している。石田は、先述の「人間学としてのダンス」概念と同様に、武術も、型・儀式・礼儀を備えた文化における身体技法として捉えられるべきことをまず主張する。武術を舞踊や音楽、絵画、工芸と同じく、

文化というより包括的な土壌において考察する必要があるというのである。では、実際に石田の刀と杖の演武から展開されたワークショップの場面を再現してみよう。

2 武術の型 (石田)

まず参加者には、石田の居合術と杖術の型を見て頂いた。居合術は江戸時代から継承されている無双直伝英信流の型、杖術は様々な身体操法の理論を組み合わせで創作した独自の型である。前者は伝承の過程で理論的な整合性を失いかけたものもあるが、できるだけ独自性を加えず、伝えられた型そのままを演じ、伝承文化としての側面も見てもらいたいと考えていた。一方の杖術では、杖と身体の関係が互いに影響しあいながら変化する様を示した。

Fig. 4 石田による居合の型



<武術の稽古について>

武術を学ぶにおいて、試合と同様に実践的な動きを自由につなげてゆく「乱取稽古・地稽古」などと呼ばれるものに対し、基本的な理論を学ぶ為に、定められた通りの手順に従って繰り返し行なわれる「型稽古」というものが存在する。中には数百年に亘り受け継がれてきたものもある「型」というものが深い意義を持っている

Fig. 5 石田(左)と弘田(右)による杖術の組み演武



るといふことは、それに関わる者のほとんどが理解しているであろう。これは武術に限らず、日本の伝統的な舞踊や音楽などの諸芸においても、同様のことであると思う。ただ、武術の場合は必ずしも「一般的な意味での型」がそのまま実戦的な有効性につながる訳ではないということも広く知られていることであり、それ故に型というものに対する価値観が多様化している。筆者は無双直伝英信流という古流の居合術を出発点に、様々な形で武術稽古の枠を広げてきた。その最大の手掛りとなったのは、古流居合術の基本の型であった。

<固定と変化の理論としての型>

その展開の根本となっているのは「空間固定・相対固定」(固定理論)という考え方である。これは「動く為に固定する」、あるいは「動きの明確な基準を持つことで、表面的な動きを隠す」というものだ。空間固定とは身体の一部(主に手先)を空間上の任意の座標に固定し、それ以外の部分が変化をすることによって、結果的に固定した部分も変化の一部になるというものである。これに対し相対固定は、身体の一部を身体上の別の部分に対して位置関係を固定して動くというものだ。

これらは主に手先と体幹部の関係において行なわれ、手先の能動的な動きを抑制する意味がある。武術の型の中で空間固定・相対固定という二種類の固定は、多くの場合身体上の複数箇所で行なわれる。つまり複数箇所を同時に認識して動くということが求められるのである。居合術とは刀を鞘から抜き出しつつ敵に切り付ける技術を学ぶものである。当然変化の主役は刀や、それに直結する右手ということになる。変化の主役であるからこそ、その部分を敵から隠す必要がある。最も動かしたい部分を最後まで隠しておく為の方法論が固定理論なのである。古流居合術の型には、一見不合理に見える動きも多い。これは不利な体勢から、わずかな変化によって瞬時に形勢を逆転する為のメソッドが、型の中に込められているからである。

型を正確に学ぶということとは、動きそのものを身に付けることではなく、理論を体得するということである。一つ一つの型の中に込められた理論を拾い出し、その日常的な動きとは質的に異なる身体操法の理を見出すことが、型を学ぶ意義であると言えるだろう。これは即ち型に汎用性を見出す作業でもある。想定された敵の動きに対して、定められた手順で対応するというのは、型の表面に見えるだけのことであり、本質とは必ずしも直結しないということを経験しなければ、型の本意を理解することはできないはずである。空間固定・相対固定は、具体的な動きとして捉えることができる。これに対して「空間変化・相対変化」という考え方を、筆者は型を理解する概念の一つとして持っている。

空間変化とは可視的な変化、つまり日常的な感覚と同じで、空間上を動いているものを変化しているものと捉えることである。一方の相対変化は、それ自体は空間的に静

止しているが、空間変化する物との対比によって、その関係が変化しているという考え方である。簡単な例で説明すると、右手を上にはげるとい動作において、肩から先の右腕は空間変化を行っており、右手以外の身体は外見的には静止しているが、右手に対しては相対変化が起こっているという捉え方である。要するに変化というものの基準を固定化しなければ、変化という概念自体が多様化するということだ。この相対変化を自覚して動くことによって、型の意義をより精密に理解することができるようになる。先述の複数箇所同時認識の感覚も、相対変化を知ることで理解し易くなるかと思う。

<実技> *居合術/体術

1)無双直伝英信流居合術「前」

左右の手と刀や身体の関係がどのように変化するかを見る。

Fig. 6 --1 始動前



2 身体に浮きをかける



3 左手/空間固定 右手/相対固定



4 抜き付け



2)遊武会居合術基本操法「一本目」

この型では主に足の動きに注目し、空間変化と相対変化を説明し、体験してもらう。

Fig. 7 --1 両手を刀にかける



2 左手/鞘引き 右手/空間固定



3 左半身を開いて抜き付ける



3) 遊武会体術技法「胸持ち一重崩し」

胸元を強く握られた状態から、自分の体を変化させるだけで、できる限り力を使わずに相手を倒す技。

Fig. 8

1 手をかけつつ体を開く



2 手を相対固定し体を閉じる



3 膝を下して倒す



Fig. 9

1 同じ「胸持ち一重崩し」の体験で、まず腕力の確認を行ってもらった。石田(左)の襟をつかむベルリン自由大学の参加者(右)。弘田(中央)はこの襟をつかむ手に体重をかけ、ぶら下がっても、この参加者の腕が下に落ちないことを示している。



2 しかし、石田の身体の重心を下に変化させるような術によって、簡単にこの参加者は膝から崩れ落ちてしまう。力を遣わない崩しである。



ここでは固定理論に基づいた動きを実際に見てもらい、その一部を実地に体験してもらった。参加者は一様に驚いたようだった。というのも、その技が筋肉の力ではなく、全身の身体の重心の変化から成り立っていたからである。

さて、上記のような考え方において、身体上で最も具体的な働きを持つのは体幹部である。手先の動きも、身体の移動も、全て体幹部を基準とした変化によるものと言える。この体幹部や体軸と、手足などの末端部分の動きを併せて認識することが、無

駄のない変化への手掛りとなる。武術に限らず、日本古来の身体文化においては、動きの無駄を極端に嫌う。これは立ち座りや礼式など、本題に入る前の所作からして徹底されており、様式美の段階にまで昇華されてきた。動きの無駄が最も出易いのは、身体最大のパーツである体幹部である。体幹部の変化を最小にし、それを基準として末端が働けば、本当に必要な動きだけが残し、無駄を排することができるはずだ。

<実技> *座法 (座り方、立ち方)

1) 立ち座り(正座)・・・体軸の起立を維持しつつ、下半身を柔らかく使う立ち方、座り方を紹介し、踵の上げ下ろしによる全身の変化を実践する。座る際には、まず左足を少し後ろに引く。左膝を床にゆっくりと下ろしながら、同時に右踵を浮かせる。そうすることで、下半身にかかる体重の負荷を解消し、上半身を起立させたまま腰を下ろす。立ち上がる際は、腰を上げてから右足を最小限踏み出し、その踵を下ろしながら同時に左膝を浮かせ、座る際と同じく体重の負荷を消しながら真直ぐ立ち上がる。

Fig. 10 一1 左足を少し引く



2 踵を浮かせ膝を沈める



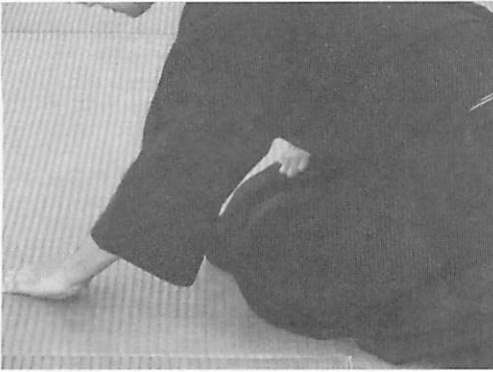
3 足を整えて正座



日常的な動作では、正座から立ち上がる際には上半身を前方に傾け、足が効率よく動く為に重心を移動させる。これに対し作法としての立ち上がりにおいては、上半身を垂直に浮き上がらせるようにし、体幹部の前後運動が起こらないようにする。そのような限定された条件を与えられた結果、踵の上げ下ろしという非常に小さい変化によって全身に浮きをかけ、部分的な負担を作らずに立ち上がる技術を身に付けるのである。立ち上がるという動作が一つの型になっているということだ。この型を学んだ結果、見える部分での無駄な動きを排すると同時に、部分的な力に頼らない効率的な身体運用法も得られるのである。全身を最も無駄なく動かす為には、体軸の変化を抑えなければならない。大きな変化は即ち体軸の変化であり、手足などの末端はそれを補う為のものでしかないからである。

2) 礼式(座礼)・・・体幹部の変化による末端(手先)の操作を、礼式に当てはめて実践する。ゆっくりと上半身を前に傾ける。上半身の傾きに左手を同調させる。左手が床に着くと同時に、右手を上半身に同調させ始めて前に送り出し、礼を完成させる。頭を上げるときは、上記の逆を行なう。

Fig. 11 --1 左手を体軸と相対固定させて下ろす

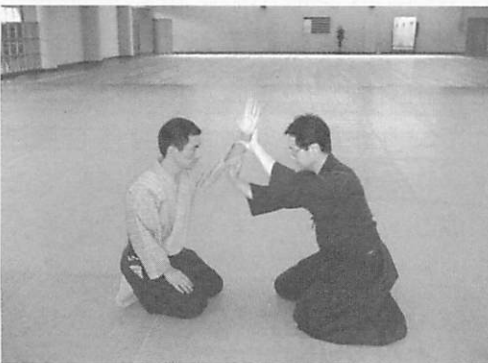


2 時間差で右手も同様に下す



3) 合気道「一教」・・・合気道の技により、相手の末端から体幹部を押さえる技法を紹介する。正座で向かい合った状態から、一方が上段から片手にて頭部を狙って手を打ち込む。打たれた方は両手でその手を受け、その接点から相手の体軸を押さえ、動きを封じる。

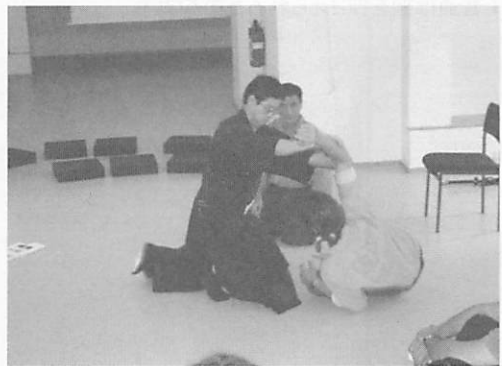
Fig. 12 --1 打ち込みを受ける



2 腕を通して中心を押さえる



3 参加者にもこの技を試してもらった。長身の学生も受けると同時に崩れてしまった。



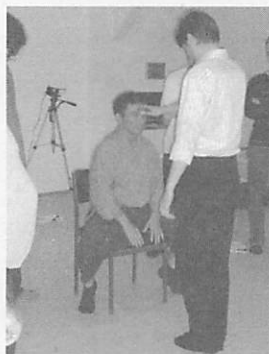
4 崩しても中心を捕らえ続ける



合気道などに代表される体術では、相手の中心を制する意識を常に持ち続けなければならない。中心を制するというのは、体軸の変化を制するということだ。相手の中心を固定すれば大きな変化を抑制できる。そして中心を押さえる技法は、主に互いの末端である手先を経由して行なわれるのである。

4) イスからの立ち方・・・腰を浮かせる際の体軸の変化について、日常的な動きと、踵の操作による特殊な身体操法とを比較し、理論を解説する。イスから立ち上がる際は、通常上半身を傾け、足元と上半身の軸を揃えてから腰を上げる。額を軽く押さえられただけで、立ち上がれなくなる。それに対し、一旦両足の踵を浮かせ、それが落ちると同時に腰を上げると、体軸をほとんど傾けずに立ち上がることができる。

Fig. 13 --1 普通は額を押さえられると立てない。



2 両足の踵を浮かせる



3 踵を下して垂直に立ち上がる



ワークショップ実施感想 (石田)

今回のワークショップでは居合術・杖術の演武、固定理論の説明を主とした居合術・体術の解説、立ち座りや礼式に際しての身体各部への意識の置き方、合気道の技法を使った身体操作の体験などを実践した。型というものが身体操作の質的転換を図る手掛りとしてあるということを伝えようとするのが、このワークショップの主眼である。礼式(正座での礼)では手を差し出しながら頭を下げ、再び元の姿勢に戻るまでの一連の動きを、単なる様式やルーティーンワークに類するものではなく、身体各部の相互関係を把握しながら動き、結果として自身のカラダを詳細に観察する感覚を身につけることを第一義として捉えるべく表現したつもりである(もちろん儀礼的、心情的な表現の方法としての礼式を否定するものではなく、身体操法としての側面に限定して、ということである)。参加者が熱心に実技に取り組む姿を見た限り、その主張は肯定的に受け入れられていたように感じる。しかし、ワーク全体の中で最も参加者の興味を引いたのは、直接触れ合って質の違う動きを体感できる体術技法であったようだ。「胸持ち一重崩し」という体術の型は、相手に片手で胸倉を掴まれた状態から、二段階に自らの身体を変化させるだけで、力のぶつかりを最小限に留めたまま、相手を崩す(倒す)技法である。これには空間固定と相対固定の二つが明確な形で織り込まれており、敢えて相手の身体を無視したまま、ある種システムチックに動くことでこそ成り立つものである。二段階の変化とは、二つの動きということと同じではない。一段階の中には、身体各部がそれぞれに必要な変化を確実にこなすことが求められており、少なくとも三箇所以上の同時

認識が必要となる。その故に、相手の身体を自分が動くための基準としてのみ認識しなければ、外的要素に引きずられて自らの変化を全うできなくなってしまう。体術技法については実践に入る瞬間まで、日本人を相手にするのと同じような結果が生まれるのかどうか、不安な思いが強くあった。骨格の違いを主とした身体構造そのものの違いや、運動感覚の違いがどのように結果を左右するのかが全く想像できなかったのだ。ところがいざ始めてみると、驚くべきことにこれまでにないほどスムーズに技がかかったのである。もちろん未知の技術に対する免疫の無さもその要因の一つであろうとは思ふ。しかし、姿勢が崩れ始めてからの反応を観察していると、そこに大きな身体性の違いを感じられた。彼らは崩れ始めると、急に抛り所をなくした身体をひとかたまりにしたまま倒れていく。私との接点である手先に身体の全てが連れて行かれるような倒れ方であった。この特徴は一教と呼ばれる合気道の肘押さえ技法を試みた際、更に顕著に現われた。これに対して多くの日本人は、崩れながらもその瞬間ごとに身体をまとめ直そうとする動きを見せる。このあたりの身体性があるこそ、日本人が「型」を文化として作り上げてこられた所以ではないかと想像される。環境に対して自身のあり方を変化させることで適応するのが日本人の特性であるということは、日本の歴史や文化からも見て取れることだ。カラダをひとかたまりに「かためる」のは、変化への対応を放棄した状態であり、「まとめる」のは変化への対応そのものである。力に頼った動きは前者に由来する表現であり、身体各部の同時変化による動きは後者に由来するものと言えるのではないだろうか。ただし純粋な力（計測可能な力学的な力）を利用することや、環境そのものを変

えようとすることにおいては、前者の感覚が不可欠でもある。私のワークを一通り終えた後休憩に入ったが、その時間中にも何名かの参加者が、互いに一重崩しの技法を繰り返し試みる姿が見られた。始めは中々うまくいかず、どうしても腕の力で引き倒そうとする動きになっていたが、横で見ながら一つずつの動きを分解してポイントを説明すると、やがて滑らかさが生じてきたようだ。相手を倒すべき対象として強く意識している限りは、自分の思うように相手は崩れてはくれず、ひたすら自分の動きを正しく積み重ねていくことに集中すれば、相手は想像以上に軽く崩れてくれる。このことに気付いてくれたとしたら、それだけで型の意義深さが伝わったことになると言えるだろう。「型」と「技」は似て非なるものではあるが、別物という訳でもない。型は動きの本意であり、技は本意を踏まえての表現ということであるということが、今回のワークショップにおいて伝えるべき最大の事項であった。

注

- 1 弘田陽介、石田泰史、池田文一「型・文化・生活 身体モノログ／ダイアログ」、教育思想史学会編『近代教育フォーラム』第16号、2007。
- 2 唐木順三『現代史への試み』燈影舎、2001、6頁。
- 3 生田久美子『「わざ」から知る』東京大学出版会、新版2007(初版1987)。
- 4 源了円『型』創文社、1989。
- 5 斎藤孝『教師=身体という技術—構え・感知力・技化』世織書房、1997。
- 6 倉島哲『身体技法と社会学的認識』世界思想社、2007。
- 7 Yasuo Imai, >>Die Idee des "Musters"

(Kata) und die ästhetische Konstruktion des Ich im japanischen Kontext<<, in: Jörg Huber (Hrg.) ,Ästhetik Erfahrung Interventionen 13, Zürich,2004. および、Masanori Kakutani, >>Teaching and Learning a Sensuous Art. The Case of Traditional Japanese Archery<<, in: Christoph Wulf und Jörg Zirfas (Hrg.), Paragrana Band 13, Berlin, 2004 Heft 2.

8 「ミメシスは、技術、科学、生活の間に線引きをするものではない。これまで妥当していた差異化の原理はそれらを区別する力を失い、指示作用をもはやもたない。新しい結びつき、差異化、思考の秩序がこうして現れ出てくる。」(Gunter Gebauer und Christoph Wulf, Mimesis Kultur-Kunst-Gesellschaft, Hamburg, 1992, S.10)

9 Brandstetter und Wulf, Einleitung: Tanz als Anthropologie, in Gabriele Brandstetter und Christoph Wulf(Hrg.),

Tanz als Anthropologie, München, 2007,S.10.

10 例えば、『判断力批判』の47節 (Immanuel Kant, Kants Werke Akademie Textausgabe V, Berlin, 1968, SS 308-)では、自然が与えた天賦の才(天才)が残した規範(これを「型」として考えたい)と、それを受け継いでいく弟子との関係性について論じられている。

11 三砂ちづる『きものとかからだ』バジリコ、2008。

12 この近代化の中の身体という論点については以下の論文を参照。Hiroyuki Noguchi, >>The Idea of the Body in Japanese Culture and its Dismantlement <<, in: International Journal of Sport and Health Science Vol.2, Tokyo, 2004. 野口裕之「生きること死ぬことー日本の自壊」、鈴木晶子編『これは教育学ではない』冬弓舎、2006。

(受付日2009年9月30日)

(受理日2009年10月22日)